



正直もの

小山内 薫

或日、一疋の兎が狼の家の前を駆けて通りました。すると、狼が

「こちら。うさ公。一寸待て。」と呼び留めました。けれども、兎は構はずに、猶と早く駆け出しました。そこで、狼が大層怒つて、その後を追つかけてました。兎は直ぐと狼に捕まへられて了ひました。

「あい。うさ公。お前は俺が留まれと言つた時に、なぜ留まらなかつたのだ。」

かう狼が訊きますと、兎は震へながら答へました。「少し急いだものですから。」

けれども、狼は聞きませんでした。

立つてゐました。

「あゝ〜お前のお嫁さんは死にかかつてゐるよ。」お嫁さんの兄さんはいきなりかう言ひました。「あの子はお前が狼に捕まへられたといふ話を聞いて、あ



んまりびつくりしたので病氣になつてしまつたのだよ。あの子から言つてゐるよ。死ぬ前に一度お前に會つて左様ならがしたいつて。」

兎はびつくりしました。狼が恐いので、どうする事も出来ません。そこで、涙をこぼしながら、黙つてちつと堪へてゐますと、お嫁さんの兄さんがかう言ひました。

「お前は俺の言ふ事を聞かなかつたから、その罰に殺してやる。併し、今日は俺も俺のお上さんも、御飯を食べたばかりでお腹がいばいだし、それに餌食もまだ五日分位はあるから、それの無くなるまで、お前はそこの藪の下で待つてゐるのだ。その時になれば、勘辨してやるかも知れないよ。」

狼はかう言つて笑ひました。兎は藪の下に坐つて、ちつとしてゐました。少しも動くと狼の目がギラ〜と光るからです。兎はぶる〜顫へながら、殺される日待つてゐました。この兎は或兎のお嬢さんをお嫁に貰ふ筈になつてゐました。その日も、そのお嬢さんの所へ行かうと思つて、道を急いでゐるところを、狼に捕まへられてしまつたのです。兎はお嬢さんの事を考へてひとりてしく〜泣いてゐました。

その中に或晩、兎が眠くなつて、少しとろ〜してゐますと、誰かが来て肩を叩きました。兎が驚いて目を覚ましますと、お嫁さんの兄さんが目の前に来ました。

「あたしは狼の許しがなければ、ここを出る事が出来ないのです。」

兎は顫へながらかう言ひました。すると、さつきから、この様子を見てゐた狼がいきなり叫びました。

「貴様達は何をそこで話してゐるのだ。」

兎は二疋とも石のやうになつてしまひました。狼の夫婦は牙を鳴らしながら、二人の前へ出て来ました。四つの恐ろしい目が、暗闇でランプのやうに光りました。

「狼さん。何でもありません。近所の方が唯あたしを訪ねて来たのです。」

兎がぶる〜顫へながら、かう言ひますと、狼は

鼻でフント笑ひました。

「何でもないと。嘘を言へ。俺は何もかも聞いてゐたのだぞ。」

狼がかう言ひますと、兎のお嫁さんの兄さんが口を出しました。

「實はかうなのでございます。この人の嫁で、あたしの妹になる兎が、今死にかけてゐるのでございます。」

それで、左様ならをしに來て貰ひたいと頼んでゐるところなのでございます。」

すると、狼のお上さんがかう言ひました。

「ふむ。それはお嫁さんが可哀さうだ。どうだね。内のお父さん。ちよいと左様ならをしに遣つてやらうか。」

狼の亭主は困つたやうな顔をして、

「でも、もう明後日食べる筈になつてゐたのだからなあ。」と言ひました。

兎は急いでかう言ひました。

兎は鐵砲の玉のやうに駆け出しました。山があれば、いきなりそれを飛び越しました。川があれば、直ぐ飛び込んで泳いで渡りました。急いで行つて御婚禮を済ませて、かならず狼の朝御飯に間に合ふやうに歸つて來よう。兎はさう思ひながら道を急ぎました。



やつこの事で、兎はお嫁さんの所へ着きました。

お嫁さんはお婿さんの顔を一目見ますと、病氣を忘れて寢床から這出しました。お嫁さんのお母さんは氣遣の様に喜びました。やがて伯母さんだの、従弟だの、近所の者だの、方々からお祝ひを言ひに集つて來ました。

「狼さん。あたしはきつと復歸つて参ります。あたしは自動車やうに、急いで行つて参ります。神様に誓つて、きつとまた歸つて参ります。」

すると、狼のお上さんが、亭主に向つてまたかう言ひました。

「まあ。御覽よ。可哀さうぢやないか。あんなにお嫁さんに會ひたがつてゐるのだから。」

そこで、狼の亭主も兎を返してやる氣になりました。その代り、兎は約束をした時間までにきつと歸つて來なければなりません。おまけに、お嫁さんの兄さんを、人質に——てはない、兎質に置いて行かなければなりませんでした。

「あさつての朝六時までに歸つて來ないと、お前の代りに、お前の嫁の兄さんを食べてしまふぞ。それから後で、お前が歸つて來ると、お前も食べてしまふぞ。だが、その時になれば、勘辨してやるかも知れないよ。」

かう言つて、狼はまた笑ひました。

けれども、お婿さん一人はみんなのやうにはしやぎませんでした。お婿さんはお嫁さんにいきなりかう言ひました。

「早く着物をお着かへなさい。そして直ぐに御婚禮をしませう。」

すると、お母さんの兎が不思議さうな顔をして、「どうして、そんなに急ぐのです。」と言ひました。すると、お婿さんの兎が答へました。

「あたしは直ぐ復歸らなければならぬのです。狼はたつた一日暇を呉れたのですから。」

お婿さんの兎は、みんなに今までの事をすつかり話しました。そして話しながら涙をこぼしました。そして、かう言ひました。

「歸るのは辛うございますが、一度約束をした事は守らなければなりません。それが兎の國の規則ですから。」

すると、伯母さん達や従弟達も賛成しまして、「さうとも、さうとも。一度約束をした事は守らな

ければならない。昔から今までに嘘をついた兎は一疋もゐなかつたのだから。」と、言ひました。

そこで、朝お嫁さんの所へ来た兎は、もう夕方にはお嫁さんと別れなければなりません。

兎はお嫁さんに向つて、かう言ひました。

「あたしは酷度狼に食べられてしまふでせう。どうかあたしの事をいつまでも覚えてゐて下さい。」

さう言ふかと思ふと、急に狼の事を思ひ出して、「けれど、狼は事に依ると、勤辨して呉れるかも知れません。」

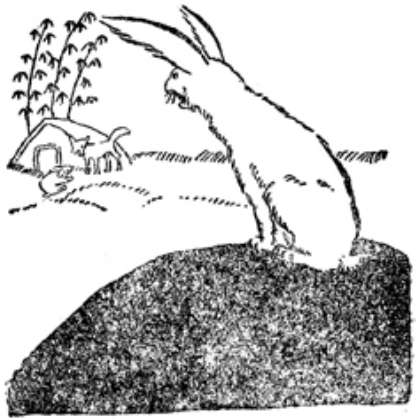
さう言つて、飛んで行つてしまひました。

二

ところが兎がお嫁さんのところへ行つてゐる間に途中の園には、急に色々な悪い事が起りました。或所では雨がひどく降つて、ついさのふ兎が平氣で越した川が溢れて、十里四方がすっかり水浸しになつて

ればかりを考へてゐるのでした。

やがて夜が明け始めました。鳥や蝙蝠は何處かへ隠れて終ひました。空気が冷たくなつて急にあたりが寂として來ました。それでも兎はやつぱり、遅れ



てはならないぞ、遅れてはならないぞと心の中で思ひながら、同じ様にどん／＼駆けて行きました。

間もなく東の空が赤くなりました。鳥が目を覺ました。蟻や毛蟲が動き出しました。けれども、兎にはなんにも見えませんでした。なんにも聞こえませんでした。唯「遅れてはならないぞ。遅れてはならないぞ。」と思ひなが

しまひました。他の所では、王様と王様とが戦争を始めて、丁度兎の通る道がその戰場になつてしまつてゐました。また他の所では、コレラがはやつて、百里四方は行き來がならぬといふも觸れが出てゐました。しかも、その上に、何處へ行つてもいろんな他の狼や狐や鼻などが、自分を待ち伏せしてゐるやうに見えました。

兎はびつくりしましたが、どうにもしやうがありませんでした。洪水の中や、戦争の中や、コレラのはやつてゐる中を、まつしぐらに駆けてました。兎は石で足を切られたり、棘のある枝で横つ腹を刺されたりして、血みどろになつて道を急ぎました。けれども、行きのやうには中々道が涉どりません。夜中まで休みなしに駆けてましたが、まだ中々先きが遠いやうです。でも、自分のお嫁さんの兄さんが質に取られてゐる事を思ひますと、悲しんだり涙をこぼしたりしてゐる暇はありません。一分も早く行つて、お嫁さんの兄さんを助けなければならぬと、唯そら、駆けてゐました。

すると、しまひに、とう／＼狼の家の手前の小山が見える所まで來ました。兎は罅中の力を出して、小山のてつべんまで飛び上がりましたが、もうそれからは一足も前へ進む事が出来なくなりました。兎はもう死にさうになりました。狼の家は地圖のやうに小さく、自分の足下に見えてゐました。それで兎はそこへ行く事が出来ないのでした。

どこか遠くのお寺で六時の鐘が鳴りました。すると狼は穴を出て伸びをして嬉しうに尻尾を振りましました。それから質にとつた兎の所へ行つてそれを前足で抑さへつけると、いきなり爪を立て、二つに裂かうとしました。すると、小山の上で死に掛かつてゐた兎が、千疋の兎が一度に叫ぶやうな聲を出して、「ここにゐます。あたしはここにゐます。」と、どなりました。さうして、小山から沼地へ轉がるやうにして飛び降りました。狼はその兎を大層讚めました。そして、兎を二人とも許して呉れました。